栴檀

双葉南小学校だより
発行日2011,7,15
№　5
発行責任者　末永幸弘

各紙報道より

福島民報　2011年（平成23年）6月24日（金曜日）　(6)

子どもの笑顔励み

学びの場から

東日本大震災では家族や家を失い、心身に大きな負担を抱える教員も多い。本県から集団移転先に赴任した教員、間借りの校舎で授業を始めた新任教員…。復興の道筋が見えない中、慣れない環境で悩みは深い。今後は教員の心のケアも課題だ。自分自身が被災しながら、それでも子どもの笑顔を励みに踏ん張る先生たちの姿を追った。

被災した教育現場・踏ん張る先生たち

原発で避難

「双葉の子、支えたい」

埼玉・騎西小に転任 佐藤教諭

埼玉県加須市立騎西小に赴任し、双葉町から避難してきた子どもの宿題の面倒を見る佐藤大志教諭＝13日午後、埼玉県加須市

埼玉県の小学校の教室。二十二人の児童の中に東京電力福島第一原発の地元、双葉町の五人もいた。

「沖縄特産の食べ物は何かな」。双葉町から埼玉県加須市立騎西小に赴任した佐藤大志教諭（三）が問い掛けた。暖かな気候を生かす沖縄の産業を学ぶ五年の社会科。児童は「サトウキビ」「パイナップル」と元気よく答えた。

児童四百三十七人のうち八十三人が本県からの避難組だ。佐藤さんは主に社会と算数を受け持つ。

町民の多くが集団移転し「双葉の子を支えたい」と転勤を希望した。

放課後は図書室で宿題の面倒を見る。避難所は落ち着いて勉強しづらいからだ。この日は約六十人が集まった。縁り上がりの一を足してないよ」「勉強は大丈夫？」。優しく話し掛ける。

「子どもたちは地元に帰りたいけど口に出さず周りに気を使っている」

勤務先の双葉南小にいた五年鶴沼はなさん（一〇）は「双葉の先生に会えない日が続いて不安だったけど、来てくれて安心」と笑顔を見せた。

佐藤さんは双葉町で生まれ育った。自宅は原発三キロ圏で一時帰宅もできない。「家族のアルバムを持ってきたかった」。携帯電話の待ち受け画面は二歳と三歳の息子の写真。「家は無事なのにいつ帰れるのか分からずむなしい」と声を落とす。

「二、三日で帰れるだろう」と出てから、本県内や栃木県を転々。三月中旬、役場機能が埼玉県へ移転した。

「児童の様子を知るには役場近くがいい」と家族を栃木に残し、単身で埼玉に。「家族の理解でできた」と振り返る。

五月から本県、埼玉県の併任教員になった。一緒に来た同僚は三人。寮の十畳ほどの部屋での共同生活。「プライベートな空間は二畳」。テレビはなく、支援物資のラジオでニュースを聴き、夜は授業の反省会だ。

埼玉県の別の場所に移った妻と二人の息子には週末に車で一時間かけて会いに行く。「一週間ぶりに息子に会うと、成長を感じる」。なかなか会えない寂しさが募る。

最初の授業で児童から「初登場」の声が飛んだ。久々に板書し、教員の仕事を実感し授業ができる喜びをかみしめた。

「当たり前だった子どもと接することを幸せに感じた。埼玉の子も相談できる先生になりたい」と力を込めて語った。

教員8人、児童生徒サポート　埼玉で併任辞令

埼玉県加須市に勤務する双葉町の双葉南小の教員六人と双葉中の教員二人は埼玉県教委から併任辞令を受けている。避難した小中学生合わせて百六十九人が慣れない環境で口数わないよう、きめ細かいサポートをしている。

双葉郡内の八町村の小中学校二十七校のうち、四校は他の自治体で再開することができたが、二十二校は福島第一原発事故により学校機能を休止している。県教委は避難している児童生徒を引き続き支援するため、双葉郡の三百九十人に兼務辞令を発令し、教え子がいる学校を中心に配置した。担任教員を補佐し、児童生徒の心のケアなどに努めている。

高校は双葉郡の他、南相馬市の八校が県内各地にサテライト校を設置。八校の教員三百三十人はそれぞれのサテライト校で勤務している。

学びの場から

元中学校教諭で教育評論家 法政大教授 尾木直樹さんの話

被災地の教員は学校や避難所で、子どもの命や地域住民の安全を守る大きな役割を果たした。自分も家族を亡くしたり、家を失ったりして被災し、心身に大きな負担を抱えて働く教員も多い。行政は教員に聞き取り調査し、困ったことや不安がないか、どんな支援が必要か把握する必要がある。被災地に教員を大量に派遣して、交代で休めるようにし、子どもたちでなく、教員の心もケアする体制をつくるべきだ。

精神面も配慮を

◇避難でちりぢりの教え子たちが近況報告

携帯電話には、さまざまな制服に身を包んだ教え子たちの写真がある。東京電力福島第1原発事故のため、福島県双葉町にある町立双葉南小学校の林香世子教諭（45）は、受け持っていた6年生を卒業式で送り出すことができなかった。避難先で中学に進んだ教え子たちは、真新しい制服に身を包んだ姿をメールで届けてくれた。今はちりぢりだが、いつか同じ制服を着て地元の中学に通える日が来ることを祈っている。【山本健太】

「先生会いたいよ」。林さんの携帯電話には、連日のように教え子たちから電話がかかり、メールが送られてくる。避難先は、県内ほか新潟、群馬、埼玉、千葉、富山。ばらばらに避難した6年2組21人のうち、12人からは制服姿の写真が送られてきた。見慣れない制服を見ると、無事進学してくれたうれしさと、地元中学校の制服姿を見たいという思いが交錯する。

「今日はサッカーを見てきた」。その日の出来事など近況報告が途切れることはない。努めて明るく振る舞っているようでも、話していると寂しさを隠せない子もいて、切なさが募る。

「卒業式がしたい」。そう口にする教え子もいる。3月24日に予定されていた卒業式では、保護者への感謝の気持ちを込め、「旅立ちの日に」を合唱するはずだった。懸命に練習する児童たちの姿が目に浮かぶ。

林さんは5月から、児童の心のケアのため、双葉南小の児童も転入している猪苗代町内の小学校に移った。中学1年の息子と小学5年の娘を埼玉県内の妹宅に預け、小学校教諭の夫と会津若松市内の学生向けマンションで生活する。

今月、双葉南小に通っていて今は林さんが勤務する学校に転校してきた5年生の女児が「双葉に帰りたい」と泣きじゃくった。自身の願いもこの子と同じだ。

携帯電話を持っていなかったり、避難所暮らしで話ができない子もいる。「一目会って手を握りしめたい」。そんな思いを込めて、全員にあてて手紙を書いている。

毎日新聞　2011年6月26日

お知らせ

3月　6年生を送る会

震災から四か月、状況はあまり進展していませんが、防寒着を着ての避難から季節は半袖の盛夏へ、間もなく一学期も終わろうとしています。暑い日が続いていますが皆様、お元気でしょうか。

南小としては、この間、学校の事務局が置かれたホテルリステル猪苗代において、児童の転出関係の事務や会計処理、報告など年度末にできなかった仕事を一通り終えることができました。

皆さんのお手元に通知表や会計報告を間もなくお送りします。尚、通知表に関しては三学期の評定・評価は、記載できませんでした。事情お汲み取り頂き、ご了承願います。